協働のまちづくり推進委員会（第７回）結果概要

日時：平成 25 年 1 月 16 日（水）18:00～20:25
場所：八戸市庁別館　２階　会議室Ｂ

本会議の結果概要を、次のとおり報告する。

■ 会議概要について

(1)「元気な八戸づくり」市民奨励金制度について

・市民活動サポートセンター登録団体、奨励金被交付団体を対象としたアンケート調査結果と、第 6 回委員会での意見を受け、具体的な見直し案について意見交換を実施。

■ 今後のスケジュールについて

○今後のスケジュール（予定）

４月下旬　　第１回協働のまちづくり推進委員会　開催
５月下旬　　第２回協働のまちづくり推進委員会　開催
６月下旬　　第３回協働のまちづくり推進委員会　開催

■ 出席者（敬称略）　※参考

・北向　秀幸　委員長
・浮木　隆　　副委員長
・佐藤　博幸　委員
・五戸　保夫　委員
・齊藤　綾美　委員
・田頭　順子　委員
・西島　拡　　委員
・市民連携推進課（3 名）

第７回 八戸市協働のまちづくり推進委員会　議事録

日　時　：平成 25 年 1 月 16 日（水）　18 時 00 分
場　所　：市庁別館２階　会議室Ｂ

■ 次第

１　開会
２　委員長あいさつ
３　「元気な八戸づくり」市民奨励金制度について
４　その他
５　閉会

次第2　委員長あいさつ

■委員長
・みなさん、明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願い致します。
今年度とすれば委員会は今日が最後ですので、来年度の内容に向かって、この市民奨励金について少し見直しする時間を頂きたいということをお願いしておりました。
・この委員会は活発な議論が行われる委員会という印象がありますので、コミュニケーションを取りながら本年度もどうぞ、よろしくお願いいたします。

次第3「元気な八戸づくり」市民奨励金制度について

■委員長
・今日の案件は一つだけです。「元気な八戸づくり」の市民奨励金制度の見直しです。
・これについては前回の委員会でも少し意見交換をしたわけですが、本日は具体的な見直し案についても意見交換をさせていただきます。皆さんの席にある資料の確認をしていただきます。
■事務局
・はい、後ほどご説明させていただきます。
■委員長
・それでは具体的な見直し案と、奨励金の話しです。新しい委員もいるので、その辺も踏まえて見直し案というかたちで、事務局のほうからご提示していただければと思います。よろしくお願いします。
■事務局
～資料の説明～
■委員長
・みなさまの手元に資料３のアンケート調査結果があります。これは見直しするにあたってアンケートを取っていただいたものです。

・これは非常にありがたくて、委員会の中で制度を見直ししなければならない時に一方通行でよくわからないところがあったのですが、これはデータ的なものと、率直な生の声と両方返ってきておりまして、資料を少し見ていただくと結構生々しく書いていただいているところがあって、なかなか見ごたえがあるなと思って今眺めていました。

・ちょっとこちらに目を通していきたいと思っております。資料３でグラフになっているところが、８ページありますので、市民奨励金の仕組みの部分の理解も含め、これを見ていきたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。

・では、資料３のほうを見ていただきたいと思います。これは、事前に市民活動サポートセンター登録団体などにアンケート配布して、約半分の４９％から回答がきたものになっています。

・まず、「元気な八戸づくり」の奨励金についての認知度、問１は認知度の質問です。これは知っているか、知らないかの話しです。その後の問２が、知っているけれども交付を申請したことがあるかどうかの比率で、これは申請したことのないほうが若干多いです。６１団体のうち、３９団体が知っていても申請しないということです。

・２ページ目に行きますと、どちらのコースですかという質問です。申請したところが「初動期支援コース」１８団体、「事業拡大支援コース」３団体、無回答が１団体で合わせて２２団体のうち申請したコースがどちらだったかということです。

・また、申請した結果、手続きが結構大変だということで使い勝手が悪いという意見が、以前の委員会の中でどうしても出てしまう意見でした。実際どうかというと、比率から言えば、２２のお返事いただいた団体の中でいうと良いというほうが若干多い。その中で、内訳は２ページ目のようになっています。

・特に初動期のほうが圧倒的に数が多いですが、初動期のほうはどちらかというと審査もそんなにいろいろ細かいところまで突っ込まないし、予算規模も小さい団体が多いので、あまり申請が難しくないかもしれません。

・そして、3ページ目では問５で良いと思った理由です。このようなグラフが出ております。４番５番の、申請しようとした時に「市に相談にのってもらえる」など親切に対応していただいているという回答と、「応募回数が一回限りではなく、一回、二回と応募できるという回答」、その辺りが大きなプラス評価の部分です。

・それから、問６の使い勝手が悪いというところは、これは結構回答がバラけています。選択肢は事務局側で作ったと思うのですが、よく言われているのが報告書の提出が面倒だということと、それから応募回数が少ないということ。この辺りは３、４つの意見がだいたいまんべんなくありますので、結構「負担だ」ということを皆さん思ってらっしゃるのかなという感じですね。

・それから4ページ目の問７では、申請したことのない中で検討したことがあるという団体は約半数ということになります。

・申請しなかった理由も結構バラけていて、どれが一番というのはないです。大部分を占めるのは「公開プレゼンテーション審査会が大変」、「募集時期があわない」という意見だと思います。このような“不満足要因”があり、面倒で申請しないという理由がこのように

なっています。
・あとその他の意見のところで、出ている意見をまとめたのがページ下のほうにあります。
・では５ページ目の問９に、改善すべき点についての具体的なご意見があります。せっかくのアンケートなので、この辺は読んでいただきたいと思っております。それでは５分程度お時間をいただきまして、各自アンケートを読んでいただき、印象を作っていただければと思います。

〜各自、資料に目を通す〜

■委員長
・ここで今回実際アンケートを取って調査する中で、今回見直し案ということで一つ出ているわけですけれども、全体の方向としてかなり大雑把な話しになるかもしれません。
・今の段階では、この調査結果と変更内容については切り離した意見でもまだ構わないと思っています。委員の経験を二期以上されている方からご意見を伺いたいです。
■委員
・アンケートの問９の中にまとめていただきましたが、やはりプレゼンテーションが苦手な団体もあるだろうということです。
・思いをかたちにして伝えるというのが、一生懸命やっていても、なかなかそういうのが難しいというご意見や、書類を簡単にしてほしいというのがある。
・それを今後、公開プレゼンテーションではなく、公開ヒアリングにしてはどうかというようなことです。このアンケートから見て取れると思っています。
・アンケートですから、無記名だと書きたいことをいっぱい書いている人がいるのですが、あまり書きすぎてどこの団体だかわからないところがあります。団体名を書かなくても団体のことを書いている人たちもいる。その辺が面白い。
・ただ、どうしてもイベントに補助しているというイメージを持っている人たちがいるが、別にイベントに補助しているわけではないので、その辺のＰＲも必要なのかと感じています。補助金というと、何かのイベントみたいな感じですけれど。
・柏崎の交通安全パトロールはイベントではないし、事業拡大支援コースを活用して、基盤整備をしているところもある。どうもイメージがイベントみたいなものと捕らえる人が結構いるのだという感触はありました。
■委員長
・ありがとうございました。プレゼンの部分とイベントの感想ですね。
■委員
・まず、このアンケートの対象になっているのが、ある程度活動を行っている方なのに、わからないとか知らないという意見が出てくるので、まだまだ周知不足なのかなと思って見ていました。
・ただ、初動期の方たちだと思うのですけれども、親切に教えてもらったという意見があって、その辺がすごく良かったのではないかなと思っています。

・特に、こういった活動に慣れていない方たちからすれば、入りやすい制度なのかと。また、役所の方たちも親切に教えてあげているみたいなので、そういったところが良いのではないかなと思っていました。

・勘違いされている方も確実にいるのかなということを、このアンケートを見て思っています。その辺がＰＲ不足なので、もうちょっとＰＲしていくのが必要なのかなと。

■　委員

・意見がダブるかもしれませんが、やはり役所との関わりを持つ時に書類作りというのが、どうしてもネックになるのだろうと思っていました。

・それから、プレゼンテーションをして、事業をやって必ず報告する、発表するというところが、これもやらなきゃいけない、あれもか…と気が重くなるのかなと。

・その中で、その団体にどう役所、行政が個別に関わっていくかということが、一つの大きな役割なのだろうなと。その辺りを、役所の方から少し苦労話しとか聞かせてもらえればと思っているのですけれど。

・それから、奨励金で終わるのではなくて、潤滑的に次へつながっていく資金運用というか、そういった場合にどのようなバックアップを行政のほうでしていくのかということが、次の事業をしていく大きな励みになるのです。１年だけで終わるか、２、３年続けてやるか。それから中には数年続けて行っている援助、奨励金もあるので、その辺の見通しが大事ではないかと思っていました。一年目の私としては、その辺も、苦労話しを含めて少し聞かせてもらえればと思います。

■　委員長

・では、事務局から苦労することを話していただきますか。

■　事務局

・そういう一連の申請の相談の段階で、一番最初に私が苦労するのは、申請の時点で団体としてこういうのがやりたいんだ、ということが固まっていない団体さんがすごく多いことです。そこからお話しを聞いて、いろいろと「こういう事もやっているんであれば、こういう風な事業の組み方で申請というのもありえますよ」というアドバイスをするなど、やはり一番その部分の苦労が多いですね。

・あと、どうしても補助金ということで使い道など、ある程度具体的に示さなければならないものですから、その辺を問うと、どうしてもどんぶり勘定で計算してきているような団体が多くて、そこを上手く、あまり強い口調ではなくやんわりと言うのがすごく苦労すると思っていました。

■　委員長

・どうでしょう。何か質問などありますか。

■　委員

・プレゼンの時にちょっと中に入ってお手伝いしたことがありまして、こうしようという一つのスタイルがあると思うのですが、なかなか地域の方がまとめられず、そこをお手伝いしてもらってプレゼンまでやれたことがあったので、どうやって役所の方が、地域のそういう方をバックアップやサポートしていくか、ということが一つの事業をやる基になって

いるのかなと思います。

■　委員長

・親切にしてもらったというアンケートが、結構返ってきています。これは素晴らしいなと思って見ていました。

■　事務局

・正直、どこまで踏み込んでアドバイスしていいかというところが、すごく悩みます。

■　委員

・やはり、あなたたちは何をやりたいんですか、ということなんですよね。

■　事務局

・あまり親切すぎても、今度は逆に団体のためにならないということもあるので、担当者はその境目が非常に難しいという話しを聞いています。

■　委員

・なにか補助金があるのだったらもらいたいと来るのが一番困る。

■　委員長

・苦労話しで受け止められると困るんですが、やはり申請する時に会の目的が明確じゃないとすごく審査しづらい。やってみるとわかる事ですが、補助金を申請するのに会の目的と合っているかよくわからないと、すごく点が下がります。

・そういう意味では、プレゼン審査上、提出書類で会の目的や方向をはっきりしておいてくださいという感じにするのは、ある意味実務的なところにおいても会の今後を決めていくにあたっても大事なことですし、テクニック的なところでも大事なところです。

・そういうところで悩むというのは初耳だったので、意外でした。決まっていなくても、とりあえず仲間で集まってやってみようという動きになるのですね。そういう意味では、ＮＰＯが始まって間もない、ヨチヨチ状態の団体へアドバイスしていく。

・それで、やはり行政との関わりの中で補助金をもらいながら活動していくというのが必ず出てくる話しですが、最初のうちは結構二の足を踏むかもしれないですね。どうせ申請しても、と思うかもしれない。そういうところで窓口になっているということは、結構いい窓口になっているかもしれないですね。ヨチヨチ状態の団体さんにとってみれば。

■　委員

・これは今まで役所の敷居が高かったのが、「役所ってこんなに親切なんだ」という認識を持ったアンケートだと思う。役所というのは、なんか愛想が悪いと思われているかもしれないが、この補助金で行ったら、「役所ってこんなに愛想がいいの？」という印象を持ったということが表れたアンケート結果だと思って、読み込んでいる。

■　委員長

・結構、そこは良い窓口になっていると感じました。

■　委員

・このアンケート結果を見て、イベント的な催しものに助成金を出しているようだけど、地味な物にも必要という意見があって、そういったものも必要だと思いました。

・地味なものがどういうものかというのがありますが、作成物というかマップとか本などに

対しての制度があればこれにも結びつくのかと。そうするとイベントだけではなく、地道だけど浸透できるようなものが積み重なることも、必要な事項かと思います。

・あとは、この奨励金自体のＰＲ方法をもう少し簡潔にしてほしい。私もアンケートに答えた団体の一人ですが、見るからに大変そうです。

・このアンケートを出したところへ結果的にお知らせするのもどうかという意見も書いていたんですが。もう少し簡潔に所属している団体の人にわかり易く、今年度はこういうことをして、時間もどうでしょう？といった勧誘のような意味も必要かと思います。

・私もこの委員会に入るまでわからなかった面もあるので、もっと簡潔な感じでＰＲできないかなと。軽い気持ちではダメなのかもしれないけど、「軽い気持ちでやってみようかな」というのも必要だと思っていました。

・最初から「貰うものは貰っちゃえ」というのはダメだとは思うけれど、最初はそういう軽いノリでやって内容を濃くするとか。例えば、階段を上がろうか、どうしようかという時にちょっと難しそうだからと階段を上らずに終わるよりは、ちょっと上がってみようという気持ちを勧誘、誘発するようなＰＲの仕方も必要かなと思いました。

■ 委員長

・そういうＰＲの問題ですね。間違いなく奨励金の内容は良い方向に見直されるので、ＰＲの方法の工夫の部分ですね。

■ 委員

・ＰＲに関して言えば、ホームページに採択された事業に関する情報をもう少しわかり易くしてほしい。

・委員に対してではなくてＮＰＯに対して、この事業は具体的にどういう事をやって、どういうところにお金を使ったとか、そういうことを学べるものが、インターネット上でもいいのですが、お金がかかるかもしれませんが、どこかで冊子みたいな形で見られるといいということは感じました。

・あるいは、採択した団体さんの負担になるのですけれども、ＮＰＯに対する、何か発信する場も設けられたらいいという事は感じました。

・あと私の個人の印象としても審査基準が不透明ということが出てまして。継続性、自発性など、基準としてはあるけれど抽象的なので、そこがたぶん審査される側も分かりづらいし、私も戸惑っているところがあって、そこが難しいと思います。改善策はすぐ思いつかないのですが。

■ 委員

・アンケートに限らず、いわゆる奨励金制度そのものを知っているか知っていないかということで言えば、半分は超えるのだろうと思うのですが。

・具体的に自分達が日常活動していることが、対象になるかどうかというところからすると、良くわかっていない団体さんがいっぱいいると思います。

・私も相談を受ける時は、まず自分たちの活動していることが奨励金に限らず、補助金や助成金の申請手続きを聞かれた時にアドバイスするのは、要するに出す側が求めている事と、自分たちが活動している事が合致しているかというところが第一ハードルではないですか

と、アドバイスしたりしている。

・それから、私は最初に奨励金制度そのものの全体像みたいなのは知っていたのですけれども、じゃあ具体的に初動期とか拡大とかになってくると、ほとんどわかっていない。

・実際に成果発表会を聞きに来て初めて具体的な活動内容がわかって、ねらっていることが見え始めるわけです。

・だから私が実際に成果発表会の会場に行って、いわゆる発表者以外の一般の参加者が少ないので、一般の方に参加してもらって、実際の発表されている内容を見聞きしてどういう団体や事業が該当するのか分かってもらっていくのが一番いいような気がしている。

・だから、その発表の場を公民館に出向いて行って、今年はこの公民館、何年度はあの公民館という感じで、発表する場所を変えていって、その周辺の人たちにも聞いてもらうような発表の仕方をしていけば、おのずと理解する人が増えていくのではと考えたことがあります。

・事業拡大支援コースが少ないのは、わかりづらさだと思う。事業拡大させる団体を求めているけど、その辺が当事者である応募する側は、拡大することが具体的にイメージできないという事だと思う。だから、私は今回の拡大コースと地域づくりコースが統合されるというのは、やむを得ないかなと資料を見ていて思います。

・協働のまちづくり推進委員会として求めているのは地域づくり応援コースという従来の活動、いわゆる地域住民が自ら取り組む事業であって、それが新たなアイデアに基づくものであったり既存のものが改善されていくものであったりというものを求めているのです。私はまさに、これまでの地域づくり応援コースというのがどんどん増えてほしい活動なので、この統合をきっかけに、ちょっと手を加えたほうがいいというような気がしています。

■　委員長

・ありがとうございます。全体としてまず意見をいろいろ頂きました。今回は調査の結果と皆さんから頂いた意見を受けて、今回変更という一つの案を、少しでも使い易いものにしようという大雑把な話の中で、無理がないかチェックしながら、皆さんにご検討頂けたらと思っています。

・まとめると、「プレゼンの大変さ」、「イベントの補助金に見えてるのではないか」という意見がアンケートの中にありました。

・一個一個、話しを膨らましていくか、変更案の話しに絡ませながらやっていくか。いろいろな意見が出るとは思っていましたけれど…。

・イベントが多いというのはどうですか、何度か審査を経験してみて事業拡大に関しては、イベントが多かったというイメージですか。そうでもないような気がしていますが。そう見えてしまうのかもしれないですけど。

■　委員

・ＰＲですが、補助金が欲しいところは、必死に探している。だから、認知度が低いということは別に補助金に頼ってないというか、必死に探していない団体もあるから低いということではないという認識はある。

・欲しいと、本当にギラギラして「あの補助金、この補助金…」となる。助成財団のホーム

ページから始まって入っていくのでしょう。

■　委員

・３ページの一番下のところに、選考の基準、審査員の基準ということで意見が出た場合は役所としてはどういう説明をしているのですか。具体的にこういうことをやっているんですよ、ということでお話ししていると思うのですけれども、目に見える資料を提示しながら、皆さんにわかってもらう、そういう説明の機会というものはあるのですか。

■　事務局

・一応、審査基準ごとに各委員の皆様に付けていただいた点数…当然審査員の名前は伏せますけれども、もし開示請求があった場合は、その点数は見せて差し上げることはやっております。

・問題はその点数をどう付けたという基準が不透明だというお話しをされているので、それに関しては、審査の話しが出てしまったので後ほどご説明させていただきたいです。

・それから、皆さんから意見を聞きたいことがありますが、ヒアリング審査会をたたき台にしようと思っていて、ヒアリング審査会に移行した際に、その審査項目ごとに、例えば審査基準の発展性、自立性、貢献性や計画性などの項目ごとに申請する団体の皆さんにこの部分はどういう考え方をお持ちですかという自由記述をさせていただこうかと考えています。非常に細かい話になってしまいますが。

■　委員

・申請の時にその場を設けて、発展性に関して、私たちはこういうことですと…。

■　事務局

・そうです。「計画性の部分では我々の団体ではこういった事を考えて…」と話していただくと、おそらく委員のみなさんも審査しやすいし、ヒアリングの選出もしやすくなるし、少し明確になっていくのではと考えていました。

■　委員

・それは面白いかもしれない。

■　事務局

・あくまで案ですが、募集要項の付箋を付けてある１３ページの事業計画書の期待される効果のあたりと、ピンクの付箋を付けた６ページ目のところに、審査基準が書いてあるので、そこに基づいて検討していただくのはどうかと。

■　委員

・そういう質問は出てくるとは思います。

■　事務局

・これまでは点数で公開するしか方法はなかったというようなところがありました。

■　委員

・ある程度、説明するための材料というのは、こちらで揃えておかなければならない。この中では、皆さんざっくばらんに意見交換し、明確な集計をしているとは思うので、一応はまず、十分に対応できるのだろうとは思っていた。

■　委員

・どうしてもこの審査基準は審査する時、この自立性、発展性というところで必ず求められていることに、沿った形で期待できるかどうかと、一個ずつ見ていきますが、一番大事にするのは、事業実施により期待される効果というのは、ある目的・目標と、それに対する手段とがマッチングしているかどうかというところです。こういう事を期待しているわりにやっている事がちょっとマッチしていないと思えば先に点数を半分以下という感じで決めてしまいます。

■　委員長

・採点は本当にいつも難しいと思って採点している。点数をつけるのはどうなのだろうと思いながらやっている。私は個人的に委員をやってきた経験の中でいうと、審査する書類を読んだ時にストーリーが見えるかということです。

・ストーリーといっても、プレゼンに慣れた方はストーリーができあがった緻密な申請書類で申請されるので、黙っていてもこれは満足しそうだと感じるものが出てくる。逆に表現の仕方がまだうまくないところは読んでいても大丈夫だろうかという印象になってしまう。

・それを発展、自立、貢献というキーワードを頭の中に入れながら読み解いて、ストーリーを読み解くという形で点数をつけておりました。

・今の事務局の話しのように、こういう五つの項目の中でストーリーを書いてくださいと言ったほうが、たぶん書くほうは書きやすくなるし、読み取るほうは読み取りやすくなる。基準を入れた方が、プレゼンのための要所を書くレベルは上がると思います。

・そうすると、すごく良いことを考えているのだけれど、書き方が悪くて審査を通らないということが無くなっていくわけです。たぶん、一生懸命書いたけど伝わらないから選ばれなかったというところで不満は生まれてしまうと思うので。基準を設けることで、書きやすくして、後はがんばってくださいという風にしてあげると、書き方のレベルが上がると思う。

・今までは、どうしても読み取る側が一生懸命読みとっていたので、書き方のところでもうちょっとがんばってほしいということがありました。「プレゼン審査会でもうちょっとこれを聞かなければ」というのが、たぶん無くなるはずです。そうなるとヒアリングだけで良くなってくるので改善になっていると思っています。

■　委員

・あまり答えられない団体に聞くといじめているみたいになる。これ以上聞くのかと目で訴えてくる。そこが難しい。

・ただ選考の透明性というのは、事務局からの話しがありましたけど、有効性とか継続性とか、私たちはこう考えていますと入れてもらったほうが見るほうはわかりやすい。

■　委員長

・ストーリーが書きやすくなっていますから、読むほうもストーリーが浮かびやすくなる。それは改善としていいと思っています。

■　委員

・そのほうがはっきりしていくのでいい。

■　委員長

・今の資料の中に出てくる選考基準が不透明というのは、それで少し改善するし、書くほうも書きやすくなる。要は一生懸命書いたけどわかってもらえなかったっていうのは、そこだと思うのですよ、ギャップを感じて。
・それでついつい選考基準がよくわからないとなってしまう。はっきり、「あらすじのための枠は作っておいてあげるから、後は書いて」という話しでいけば、伝わらないのではなく実力不足と納得していただける。

■　委員
・一生懸命書いて選考されなかったというところは、アンケートに悪い意見を書くのは当然あると思う。

■　委員
・何を言いたいのか、わかりにくいところはある。審査会で、たぶんこういうことを言いたいのだろうと考えて審査する。そういうのは、無くなるのかもしれない。

■　委員
・これはこういうことだろうというのが、結構ある。

■　委員長
・ありますね。ヒアリングの時にまた聞けるので、修正かけるタイミングがあれば非常にやり易くなる。
・今、具体的な意見が出ましたが、変更後の案に載っていましたか。

■　事務局
・今のお話しは載せていません。

■　委員
・今日の話しは、いわゆる制度の変更をしますという４の１を４の２に、たたきとしてどうでしょうかという事で。それで今、話のついでに出てきた審査基準の自立性とか継続性とかいうのも、申請書類に入れて書かせたらどうかという話しですよね。

■　委員長
・そうですね、コースをまとめる話とは別で、審査方法についての改善。アンケート結果で、事前のプレゼンが大変だという意見もありましたので、それも踏まえてヒアリング審査という形でどうでしょうかというところが、一つの提案です。

■　委員
・　いいです。そのほうがいいですよね。

■　委員
・　そのほうが絶対いいと思います。

■　委員長
・　密度が濃くなります。

■　委員
・もうちょっとこう書いてくれればというのがありましたよね。こういう事言いたいのだろうから、こう書いてくれればわかり易いのにというのが、今までもあったので。

■　委員長

・今のが、具体的に出ている不満足要因ですね。大変だという意見に対して、解決策として出ているものです。

・では、先程も感想と問題点が出てきているので、それを頭に入れながら、変更前と変更後の資料を見てください。さっき一度話しましたけれども、地域づくり応援コースと、事業拡大支援コースをまず統合しましょうと。

・背景にあるのは地域づくり応援コース自体が、地域コミュニティ計画を策定した団体だけのものとしてスタートしているということで、なかなか利用がないということです。

・一方で事業拡大支援と一緒にしながらもう少しハードルを下げて、実際審査のハードルも下げることになりますが、もう少し使いやすくしてオープンにして、かつ予算のほうも一緒にしながらやっていきましょうか、というところですね。

・あとは、地域づくり応援コースのほうが補助率５０％だったものが、一緒にして８０％になる。予算が１５０万円と６０万円を足して２１０万円です。

・募集時期も事業拡大支援のほうに合わせていくということですね。審査は、公開ヒアリングというかたちの審査。そういうことで、考えていこうかと。

・方向としてはまちづくり支援ということでハードルが下がるというか、ちょっと応募し易くしましょうというイメージを作っていく方向になります。

・実際、応募団体数が去年また数が戻りました。最初のころは結構な数の応募がありましたが、最近は少なめです。事業拡大支援のほうも。だから、もう少しここは活用していただきたいです。

■　委員

・今回の改正は地域コミュニティ計画がなくてもよいということで、ハードルが一つ減る予定なので、その辺はいい。

・ 災害に強い地域づくり応援コースのほうは去年からでしょうけれども、自主防災会がどんどんできつつあって期待されるので。２７年までだから、その中でいろいろやった上で、２７年以降はこの制度継続するのかは、またその時の話だろうし、何とも言えないけれど状況によっては返ってこちらのほうがもっと拡大するかもしれないし。

・(仮)まちづくり支援コースの補助率が８割というのも、ハードルが下がっているのかなと。経済動向が良くなってくれば、応募もまた増えると思う。経済動向とボランティア活動は一体化しているから経済動向が良くなれば市民活動する人も増えるし、悪くなれば「こういうのを書いている暇はない」と活動する人は減る。そこが良くなれば、気持ちにも余裕ができる。

■　委員

・資料４の１と２のところです。４の２のほうで、まちづくり支援コースの対象事業の文言がありますけれども、私はここをわかりづらいなと思うので「市民活動や、地域活動の活性化に資する事業で」ということですが、この後半を、資料４の１の「地域コミュニティ計画に掲載されていて」というのを入れずに「地域住民自ら取り組む地域事業、既存事業を、改善、拡大して行う事業」と続けたほうが、わかり易いかな、イメージできやすいかなと思います。

■　委員

・ただ、ここは地域住民ではなくて事業拡大支援コースも一緒になっているから、大体のところは一緒だから、地域住民だけではないですよ。

■　委員

・　前半の「市民活動や」と頭に来ているので、いいかと思います。それで「災害に強い地域づくり応援コース」のほうは災害に特化していますので、こちらのまちづくり支援コースのほうは市民活動も、地域コミュニティ活動も含めた形のまちづくりという、そういう文言のほうが、イメージしやすいかと思ったのですけれどもね。

■　委員

・地域住民という、住民が自らという表記をしたいと。

■　委員

・　そうですね。地域住民自らというところを生かしたいと思うのですけれど。

■　委員長

・地域住民って、載っていても載らなくても来るかなというイメージは、私は思っていたのですけど。地域住民とあったほうが、明確なイメージが見えると。

■　事務局

・　地域住民といった時に、どの範囲でということがあります。八戸市が主な活動場所で住んでいなくても応募は出来ますが、ＮＰＯが「この地域に住んでいなければいけないのかな」と誤解を招くのではないかと感じています。

■　委員

・地域というと町内会のような地域コミュニティ団体のイメージが強くなる気がします。今までの地域づくり応援コースであれば、地域住民で良かったのですが。

■　委員

・事業拡大支援と合体しているから表現をそういうふうにしたのだけれど、●●さんは、「住民自ら」とか、「住民主体」、「住民参加」などというフレーズを入れたいということです。

■　委員

・町内会を含めて、その地域の他のいろいろな活動団体も一緒になって地域に関わることをやっていくみたいなことも認識を深めていってほしいので、私はそこにこだわりたい。

・そうしないと、どうしても「町内会は町内会でしょ」となる。今でも空気としてはそうですよね。地域づくりとなると、町内会とイコールになってしまうので。

・私は市で作った地域コミュニティ指針を読み返してみて、別に町内会が母体になってもいいのだけれど、他の団体とネットワークをつなげて活動して行くということが、先々の狙っているところだと思ったので、ちょっとした言い回しですけど、そのほうがいいような気がしました。

■　事務局

・実はその部分、こちらも考えて検討しました。「発展性」という審査基準で、そういった連携があるところを加点するようなやり方もあるのかと。

・必ずしも地域との連携ではなくて、ＮＰＯとＮＰＯ、地域と地域の連携もあるということ

で、なかなか審査もしにくくなって来るのかなと。将来的には●●さんのおっしゃっているようなかたちに進んで行きたいと思っております。そういった事も検討はさせていただきました。

■　委員

・資料４の１と２のところですけれども、対象事業の初動期支援コースでおおむね３年以内とあるのですが、ここの３年以内というところを、もう少し枠を広げてはどうか。

・３年未満で初動期支援に申し込む団体はどれくらいあるのだろうと。たとえば、５年未満となると４年も入りますし、そうなるとこの枠を広げるのもどうかと、ちょっと感じたのですが。３年というと、１年で立上げて…５年以下でもどうなんだろう、というそこの年数ですかね。

■　事務局

・実は、団体を立ち上げてからを起点にしているわけではなくて、仮に立ち上げてからも事業をせずに停滞していた団体があって、やっと３年目くらいから事業を始めた。その３年目から始めたところを起点としてみて、活動を開始してから３年目です。立ち上げたはいいが何らかの理由、例えば震災などで活動ができなかった団体などが該当します。

■　委員

・でも、その３年という枠組みはどうやってわかるのですか。

■　事務局

・それは、申請ベースです。

■　委員

・では例えば事後報告ということになるのですね。例えば１０年間やっていても、どの地点でというのは、ちょっと不透明かと思います。

・私はパッと見た時に「立ち上げて」という意味で見てしまった。実際自分が団体に所属して、活動開始してからというか、私は立ち上げてからと思っていたから今みたいに言ったのですが…。

・私みたいに、５年も経ってしまったから「やはりムリだな、初動期は」というのが素人の考えではないかと思います。初動期が、立ち上げてから１０年２０年という期間も、今聞いてわかったけれど、実際この書き方だと立ち上げてから３年だと申請できないと思ってしまう人もいるから、その辺りを簡潔に書けばいいのかなと思います。

■　委員

・５年くらいがいいのかな。３年というと、ちょうど代表者変わっていたりするので。

■　委員

・だから、立ち上げなのかブランクなのかというところが、大きく申込者も違うのかなと。

■　委員

・立ち上げのほうが、わかりやすいのではないかな。

■　事務局

・それには意見があって、募集要項２４ページのＱ＆Ａにも少し入れおりますが、パッと見で、やはりそういうような意見はすごく多いです。

■　委員

・私はだいぶ前、奨励金の申請の時に、私たちのやっている活動は該当しますかと聞いてきた団体があって、「八戸協働のまちづくり推進基金を使ってやるのだから、八戸に役立つことじゃないとダメだよ」とアドバイスしたことがあります。

■　事務局

・もうはっきり、「設立してから５年以内」のほうがわかりやすいですか。

■　委員

・そのほうがわかりやすい。申し込むほうもわかりやすいです。よく読まないとわからない。それもブランクがあって３年もいいとは思わなかったし。

■　事務局

・これまで「おおむね」という言葉を使って幅を持たせることで、使いやすくしていたという感じで我々も見ていたのですが。「おおむね」というのがどの範囲で該当するかっていう話しにもなりかねないので。

■　委員

・立ち上げ５年以内というのがはっきりしていて、わかりやすいと思いました。

■　委員

・初動期だから３年以内にしたのですかね。団体ができて５年といったら５周年記念やっているから、まだ新しいと言えるのかというのもある。

■　委員長

・Ｑ＆Ａ通り読んでくれれば理解しますけど、言わないと確かに３年経ってしまったと諦めるかもしれないですね。そこから一歩踏み込んで質問してくれるかどうかというのが、結構大変。字面だけで読んでしまうかもしれないですね。

■　委員

・５年というのもいいかもしれない。

■　委員長

・どうでしょう。表現変えて「設立５年」とやってみる手もありますが。

■　委員

・そのほうが、はっきりしてわかりやすい。

■　委員

・わかりやすいと思うな、設立から５年のほうが。

■　委員

・私も素人だからわからなかった。そのほうがわかりやすいと思います。

■　委員長

・指導、アドバイスするほうは明確でしょうね。

・これは一応、今回の意見として検討にあげられるのですか。

■　事務局

・はい、再度検討させていただきます。

■　委員長

・この件は、お二人はどういったご意見ですか。

■　委員

・変えたほうが、明確です。

■　委員

・何かやる時に３年のスパンというのが自分には染み付いている。１年目に立ち上げて、２年目やってみて、３年目まとめという感じで。５年というと結構長い。でもそれくらいの猶予があったほうがいいのかな、という気もする。３年だと、バタバタという感じでやって、それだけエネルギーが集まって力が働くという機会があるので、３年、５年くらいなのかな。

■　委員長

・５年にした場合、今度は申請のチャンスが２回ある。今まで２回目は何年以内と決めていましたか。例えば、１回目が５年目で１回やって、もしも２回目５年越えているなら次２回目はないという話しになっていたでしょうか。

■　事務局

・今は活動を開始してから３年以内に２回です。例えば活動を始めて３年経って、１回目受けて、次はもう４年目になってしまっているから２回目申請できなくなっています。

■　委員

・ところが５年にすれば、２年目で１回やって、４年目でもう１回という。２回出しやすい環境にはなるということですね。

■　事務局

・それを「おおむね」で幅を持たせていました。

■　委員長

・５年以内にしかチャンスがないというほうが、明確ではあります。

■　事務局

・５年を初動期とみなすかどうか。先ほどおっしゃっていたように初動期というと、３年ぐらいという印象が強い。

■　委員長

・自分で立ち上げたことが無いので、すみません、ちょっとイメージがわかないです。

■　委員

・だいたい３年ですよ。３年やれば飽きる。

■　委員

・例えば初動期ではなくて、立ち上げ支援コースのほうが、わかりやすいのかと。初動期というと、ちょっと言葉のわかりにくさは感じていました。

■　委員長

・　立ち上げ支援コースとなると、設立してから５年となってくるのではないでしょうか。

■　委員

・立ち上げ支援って、立ち上げるための支援みたいな感じがする。

■　委員

・　そうなると、５年だと返っておかしくなりそうです。

■　委員

・ただ、２回まで助成可能になっているので、確かに５年ぐらいだと２回目でいいのですよね、やろうと思えば。

■　委員

・　日本語は難しいですよね。確かに初動期なのだけれども。

■　事務局

・あえて初動期を使っているのは、コースの内容を変えてないというのと、変えていないのにコース名を変えてしまうと、一度、２回申請した団体がまた、名前が変わったので再度申し込めるだろうという誤解を招いてしまうのかなということで、ここはもう、変えてないという意味をあえて強く出そうということで、初動期にしています。

■　委員

・その３年以内を５年以内にするのか、そのスタート結成からカウントするのかは行政の中でも協議しなければならない。基金だけではなく、一般財源も入ってくるのだから。

■　委員長

・あと、さき程の●●さんのお話しで「地域住民」という言葉も入れたらということがありましたが、その辺はどうですか。●●さんの意見お伺いして。要は地域住民さんが主体的に参加してくれるために、ここを選んでくれるか、ということですかね。そういうところで、表現としてあったほうがいいということですかね。

■　委員

・地域住民としないで、「地域」を取って「住民自ら」という感じにしたほうが、ある意味、町内会長と限定されないでいいかな、という気がする。

■　委員長

・でも、もともと限定しているわけではないですから。地域活動というところで。あとは地域住民が来てくれるかどうか。ここしかコースが無いので。あとは町内会とかそういうところで、何かやりたいという時に気づいてくれるかどうか。

・ですからそこは、対象団体のところで、例えば「地域活動団体とは何ぞや？」というところで解説があれば、サポートできるのではないか。地域コミュニティ団体って何？と聞かれた時。Ｑ＆Ａの中に入っていますよね、対象団体のところに。これでサポート、説明はできますね。具体的にどこってなった時に、これでできますね。

■　委員

・この地域団体向けの補助金も、応募した方がいいだろうという人たちがいっぱいいるだろうけれど、誰が書くの？となった時に皆引いてしまう。「補助金をもらいたい」「あれやりたい」「いいな」となって、「やってみよう」となるが、「誰が申請書を書くの？」となった時にシーンとなって、結局「やめましょう」となる。

■　委員長

・結構地域団体の事務局さん、かわいそうですよね。1 回受けてしまうと延々やらされてしまう感じで。

・あともう一つ、「事業拡大支援」のときにあった「３年以上」というところは、この「まちづくり支援」では抜いたのですね。

■　事務局

・はい、抜きました。ある程度、予算的に余裕のある１年目、２年目の団体も、こちらのコースに申請しやすいようにということで。

■　委員長

・これ自体は、一つ心配事とすればイベント立ち上げに行ってしまうことが多いので、そこは審査の時に、「イベントだけでは」というご意見が出ていたので。

・実は、僕が審査した団体で、もう無くなっているのがある。申し訳ないですが。５０万出して、もうなくなっている団体があるので、ちょっとそれは、責任を感じています。だから、３年以内というのは継続的な意思があるということで、一つの足かせかなと思っていましたので。その文言はその時もあったのですけれど。１年目２年目でも規模的に大きなものをイメージしているところは、いいのかもしれません。

■　委員

・その補助した団体が無くなっても、その団体がその時代にやったことがその地域にまちづくりの布石を打っているのであれば、それはそれでその時代の成果だということだと思う。そう思ったほうが印象良いのではないですか。それがあるから、次の団体がまたそういうのを見て自分たちも何かしようと思ってくるわけですよね。無くなりますよ、どれもこれもと言っていたら。

■　委員長

・審査基準のところで、発展性とかその辺りで聞く必要があります。

■　委員

・申請書が今回そういうレベルになれば、聞きやすくなるからいいのではないか。

■　委員長

・あと、まずコースを一緒にして行こうということに関して、委員の皆さんはどうでしょう。時間的には、そろそろ一度収束の方向で決めておきたい、意見としては取りまとめておきたいのですが。コースをまず「地域づくり応援」と「事業拡大支援」を一緒にして、来年度は少しハードルを下げた方向で、いかがでしょうか。

■　委員一同

・異議なし。

■　委員長

・はい、では方向に関してはこれで。細かいところの話しをすると…。

■　事務局

・そうですね、資料１の後ろについている横長の表の、主な変更点のところを上から順に確認させて頂いてよろしいでしょうか。今の委員長のおっしゃった、コースの統合については皆さんおおむね良いだろうということで、よろしいですよね。

・あと対象事業についてですが、先程●●委員からもお話し出ました「住民自ら」という部分も入れ込んだほうが良いのではないかというご意見もありましたので、検討させて頂く

ということで。他にご意見があれば…。

■　委員

・まちづくり支援コースは上限が３０万円ですよね。前は５０万円。そこは下げたと…。

■　事務局

・実は今回の見直しは、現行の左の隣の「合計金額４１０万円」という金額がありますが、この総額の中での見直しをしなければならないということが大前提になっています。

・前回の委員会で、１０万円を２０万円くらいに上げたほうがいいのではないのかというご意見も頂いたのですが、こちらを取ると、あちらが立たないという関係になっているので、あえてここは１０万に設定して、（仮）まちづくり支援コースを３０万で交付の枠を７団体に増やしたというような、たたき台にしております。

■　委員

・「地域づくり応援コース」の補助率が５０％だったものを、合わせて８割にするのでしょう？だから、単価は下がったけれども補助率は８割ですよということで…。

■　事務局

・資料１にも書いていますが、「事業拡大支援コース」の、これまでの応募額の平均を見ると３３万円ということでした。その辺を加味しました。

■　委員

・「（仮）まちづくり支援コース」が３０万円で、「災害に強い地域づくり」も３０万円とありますが、この内容はどちらがお金かかるのだろうというか…。どちらかを４０万円と２５万円など、バランス的にはどうなのでしょうか。内容というか、「まちづくり支援」にかかる助成金と、「災害に強い地域づくり」にはどういう金額がかかってそれぞれが潤うのか、というのはちょっと疑問です。

■　委員

・「災害に強い地域づくり」のほうは政策的に震災復興として決めているので、補助率が１００％で、財源が一般財源だけなのでしょう。基金と関係ないのかな。

■　事務局

・特別枠ということで、年間でこの額でアナウンスをしてしまっている関係で、ここは動かせない事情があります。

■　委員

・例えばまちづくり支援コースを３０万円×７団体ではなくて、５０万円以内で総額２１０万円ですよとか。５０万円以内だから３０万円で出してくるところもあって、８割でしょう。なにも５０万円マックスで来るとは限らない。そうすると、前の去年までの５０万円がまず担保される、という考え方もあるのかと思ったりします。

■　事務局

・逆に４団体というような見せ方になってしまう。

■　委員

・４団体ではないかもしれないじゃないですか。

■　事務局

・マックスとして考えた場合の結果としてはですね。

■　委員

・マックスは５０万円で、初動期は１０万円ですよと。ただうちは２５万欲しい、８割ならなんとかできるという考え方もあるのかなと。ちょっと難しい。実際５０万円欲しいところもあるではないかと思って。

■　委員

・内容にもよると思う。どのような形でＰＲしてくるかで、同じ３０万円でもこっちのほうが絶対という時には、ちょっと不公平というか、どうなのだろうっていう部分が…。

■　委員

・そこは基金だけではなく、一般財源も入ってきているので、財政課と協議して。

■　委員長

・上限５０万円ということですね。

■　委員

・そういうのも、ありかなと。ただこれは一般財源が入っているから、財政課と協議が必要だ。そういう意見があったと課長に伝えてほしい。

■　委員長

・結構大事なところですね。３０万円という枠、金額上限がちょっと微妙な金額というのは確かにありますね。

■　委員

・これは金額のほうを固定して、団体数は流動的ということではダメなのですか。

■　事務局

・申請金額がこれまでは上限５０万円だったので、３０万、２０万と出してくる団体さんもいるので、団体数は流動的になります。

■　委員長

・上限を変えるだけです。なので、２１０万円の枠の中で、あと点数が７割とっていれば、審査で通りますので。たまたま今それが平均３３万円ということになっています。

■　事務局

・募集要項上はもちろん、この３０万円×何団体という書き方はしていないです。

■　委員

・５０万円が適当かどうかはわからないが、一応平均３０万円超えているからね。

■　委員

・上限３０万円という考え方でいくとして、２０万円があったり１０万円があったりしますが、予算内だと８団体になることは可能ですか。７団体は７団体ですか。

■　事務局

・可能です。初動期と合わせて予算の２６０万円内です。

■　委員

・今までの予算だと５団体ですね。それが７団体になると考えた時に、そこまで来るかどうかということもあるのかなと。それでたくさん来るのであれば、金額を下げてたくさんの

団体に出してあげたほうが良いということになるのですけれども、そんなに来ないのであれば、欲しいところに助成したほうがいいのかなと。

■　委員

・これは初動期１０万円×５団体となっているが、初動期が一つしかなければ、その４０万円も「まちづくり支援コース」で使っていいということですか。

■　事務局

・はい。

■　委員

・震災の補助金の１５０万円は別だけれども、あと二つの内訳は決まっていないと。

■　事務局

・そうです。

■　委員

・２６０万円の中でほとんどは可能ですよと。「(仮) まちづくり支援コース」も３０万円に限定しないで、５０万円以内にするのも一つのやり方かなと。予算ありきだから。予算がいくらあるといっても、７０％以上の点数を取って、上から順番に取っていくと、おのずと予算の中で決まってしまうから。

■　委員

・あと、今までの上限５０万円を下げなくてもいいという気もします。

■　委員

・金額が高いほうが来そうな気がする。

■　委員長

・枠を少し上げてはどうかと。最終的には審査で決まってしまうわけですが、審査と申請の状況で変わってしまうので、この通りになるわけではないという部分もあります。５０万円という一つの大きな枠は、残したほうがいいのではないかという意見ですね。

・そのあたり、皆さんのご意見お伺いしたうえで取りまとめて、どちらかで意見はご提示したいので。ちょっと仕組み的な、制度的な話しが今あるわけですが。特に、どちらでも良いというのであれば、他の委員の方、どうでしょう。

■　委員

・あってもいいという気もします。

■　委員長

・方向としては、まとめて行きたいのですが。最低５０万円という枠は残していくという方向でいくか、最低３０万円の枠でいくか、というところですね。

・意見を聞きながら、迷います。５０万円の枠を出しているところが結構あったような記憶がしているのですけれども平均３３万円っていうのが、自分としては以外だった。過去にイベントが結構多かったので、そうすると５０万円満額で申請という団体が多かったイメージがあったのです。イメージと実際は違っていました。

■　委員

・イメージはそうでした。補助金をいっぱい出していた感じがした。

■　委員長

・５０万円の枠が増えてくると、落ちる団体も半分という時もありましたね。

■　事務局

・３０万円だと、地域コミュニティ活動団体のほうが、気軽に申請しやすいのかなというのもちょっとあるのかもしれない。５０万円にしてしまうと、ＮＰＯで大きいイベントをどんどんやるというイメージもあったりします。

■　委員長

・ただ審査だから、そこは地域コミュニティ団体さんがきっちりと書類を書いてきていただく事が前提です。今はＮＰＯも地域コミュニティも同じ土俵に乗せましょうという審査だから、額が３０万円だからなるべく多くの団体にいくかなというところで、そういう一つの縛りをかけて、なるべく多くの団体にあげましょう、あげられるような状況を作りましょうという話しです。

・そうはいっても申請書類で勝負だから、ＮＰＯのほうがやはり上手だったりする。そういう意味では援助策みたいなところもある。３０万にすることによって。

■　委員

・でも、ＮＰＯでも申し込む人が少なくなっているじゃないですか。だから、５０万で良いと思う。ＮＰＯが少なくなっているから少しでもふるいにかける。本当にもらう人はもらっているから、あとは新しいＮＰＯの人達もトライできるように。

■　委員

・確認ですが、申請して、審査で受給ということであれば、満額もらえますか。

■　委員長

・基本的に満額です。

■　委員

・減額ということはないのですね。

■　委員長

・ないです。最後の順番で、例えば最後の当選になって、補欠当選という感じになれば、枠はもう何万しか残ってないけれども、という事はあります。

■　委員

・わかりました。

■　委員

・「まちづくり支援コース」の審査基準がＮＰＯと地域コミュニティが全く一緒だから。そこで審査基準が違うと、合体した意味がない。

■　委員長

・合体した時に、実際１回やってみないとわからないですよね。

■　委員

・全然出てこないかもしれないし。

■　委員長

・それで５０万の枠を大きくして、増えなければそのまま…。

・どうですか。とりあえず今、三人が５０万円枠を残したほうがいいという意見になるのですか。あとの方がどちらでもっていうことであれば、決まっている方が三人いらっしゃるので、そちらのほうで意見通して、取りまとめていきますけれども。

■　委員

・委員会でそういう意見があったということで、事務局と委員長であとは決めてもらってかまいません。

■　委員

・やはり５０万の事業と、３０万の事業では違うと思うのですよ。

■　委員長

・イメージがかなり変わります。私は５０万残してもいいと、思い始めていました。最終的にはやはり審査で決まります。ここは点数で伸ばさなきゃないなという時は、じゃあここは点数として残さなきゃないねという話しになってきますし。そこはたぶん、実際に出てくる審査の内容でしょうね。

・そこは切実な話しだから、もうちょっときちんとヒアリング審査しながら突き詰めてくださいと。それで、その中で最終的にこちら側で順番を付けて、点数を付けてあげるという話しになると思うんで。枠自体が、応募団体が７団体まで行くから、その応募のレベルとか応募の内容が変わってくるかというと、必ずしもそうではないという気がしていて。ヒアリングのコミュニケーションが一番大事なポイントかなあと思うので。委員会の意見としては、５０万の方が応募数が増えるのであれば、50 万円の方がよいということで。

・一応、減額はできるようになっていましたっけ？審査に入っていれば、減額はできないですよね？順位の中で例えば一位取っていれば、必ず基本的には満額いかなければいけない話しですよね。

■　事務局

・はい、このコースはそうです。

・災害に強い地域づくり応援コースはもっと柔軟なやり方です。

■　委員長

・減らせないですよね。一位、二位になったところは誰が見ても基本的に良くできているので、問題は地域コミュニティでここを入れようかどうか迷うところとか、ＮＰＯも地域コミュニティも、「ここどうにか、なんとかしたい」という団体が来た時にどうするかですよね。そこは議論重ねていくしかないかなと思います。

■　委員

・確認ですが、この「まちづくり支援コース」は一団体ごとではなくて、あくまで一事業でということでいいのですよね。だから、どこかとコラボしてやっても事業が違っていればいいという事でいいですよね？

■　事務局

・はい。

■　委員長

・それでは５０万円の枠についてですが、意見があったら、またメールでもください。たぶ

ん今日迷っているのは、とても濃い話ですので、気持ちが楽になればまた違うかもしれないですし。

・あと、この表の中の確認しなければならないところですが、公開ヒアリング審査会に変更していくということに関しては、方向としては良いのでしょうか。

■ 委員

・公開ヒアリングって、具体的にはどんな形でやるのかと思っていました。

■ 事務局

・他団体も聞けるようなイメージです。申請している以外の団体も。

・申請している団体と、審査員の皆さんとのやり取りを、他の団体が聞けるという感じです。

■ 委員

・順番に前に来て聞いて…終わったらこう戻るという感じですかね。

■ 委員

・その場で決めるのですか。

■ 事務局

・その後に、また仮審査をして頂いて、皆さんと意見交換してという感じです。

■ 委員長

・その日、その日中で決められるかどうかというと、違う日が良いかもしれないですね。その場で決めなきゃいけないですかね。

■ 委員

・やはり、透明性というとその場です。仮採点していて、公開ヒアリング。それでその後仮採点を一点上げたり、下げたりして…。

■ 委員

・こちらから聞く、回答するような形に変わるということですよね。

■ 委員

・公開ヒアリングだと委員のヒアリング力を問われそうで。プレゼンするほうはどんどん喋るけれども。

■ 委員

・どうしてプレゼンからヒアリングに変わったのですか。

■ 事務局

・申請の段階と、活動成果の段階と２回プレゼンの機会があるのですけれども、それが非常に負担になっているという意見が多かったので、1 回に減らそうかなということで、公開ヒアリングを案として出しています。

■ 委員長

・プレゼンのほうはプレゼン資料という形で、意識的なものだけかもしれません。やろうと思えばどちらも同じことになってしまうかもしれませんけれども。あくまで、ヒアリングの中で、どちらかというと、前より審査するほうも大変です。今の話だとこちらから聞かなくてはならないので。

■ 委員

・こちらから聞かないと答えないという事になる。

■　委員

・だから、他の団体がいっぱいいるのに、同じことばかり聞いても、逆に委員が試されているようになってしまう。公開じゃないほうがいいかもしれない。ヒアリングだけど。

■　委員長

・公開だと微妙ですね。

■　委員

・だから公開だとどうなのかなあという…。

■　委員長

・公開しない。

■　委員

・公開しないヒアリング…。

■　委員

・どちらがいいのかと思って。

■　委員

・「何時に来てください」と言って、「はいどうぞ」と、どんどんやっていって「ありがとうございました」という感じではどうか。

■　委員

・順番にやったほうがいいのか、他の団体が聞いている中でやったほうがいいのか。

■　委員

・他の団体のヒアリングを聞いていると、最初のほうからずっと聞いている団体の中には、上手に答える作戦を練るところが出てくるかもしれない。

■　委員長

・ちょっと不利かもしれないですね。

■　委員

・真似して、「ああ、こういうふうにやればいいんだ」となる可能性もあるのかと。

■　委員

・公開ではないほうがいいのかもしれない。ヒアリングは。

■　委員

・成果発表会はやるのですか。

■　事務局

・はい。それは、プレゼンで行います。

■　委員長

・公開しないほうがいいのかもしれませんね。

■　委員

・公開だと、聞きにくい事もあるのかもしれないですね。他の団体が聞いている中で変に突っ込んだ話しもしにくいのかなという。

■　委員長

・透明性というところであれば、その日のうちにしかできないですけれど、審査するほうにすれば８団体くらい応募してきたらヘタしたら３、４時間かかるかもしれないですね。３０分かけたって８団体で２４０分ですから。４時間ですよ。

■　委員長

・公開でも非公開でも時間は決めないといけないと思う。例えば「何時にしてください、何時からです」となると、たぶん２０分やって１０分休憩とかになっちゃうと、やはり長い時間かかりますよね。委員のほうがどちらかというと負担は、その日だけですけれど大変になります。

■　委員

・委員はいっぱいいるから、毎回聞かなくてもいい。誰か聞けば…。

■　委員長

・でも方向からすれば、大変ですけどそれは良い方向だと思っています。

■　委員

・ヒアリングはいいと思うのですけれども、公開するかどうか。

■　委員長

・では、それは検討お願いします。公開しないほうがという意見が今、４人くらいになってきました。

・あとは、審査の基準は先程の五つの項目を申請用紙に載せて書いて頂くように工夫したほうが良いということがありますね。この内容については今回、皆さんにお話ししていただきたかったところですけれど…。

・時間的には一時間半くらいとイメージしていましたので、結構いろいろな話しをしてきましたけど、他何かありましたらどうぞ。

・それでは、この件に関しては確認しなくてはいけないもれは無いですね。では、今の意見を検討しまして、私のほうと事務局のほう、また皆さんにメールでお話しさせていただきまして、詰めていきますのでよろしくお願いします。

次第　その他

■事務局

～今後のスケジュールの確認～